

異貌の日本近代思想 [2]

三枝博音

狩野亨吉

権藤成卿

大川周明

北一輝

津田左右吉

生田長江

内村鑑三

柳宗悦

富士川游

北里柴三郎

書肆心水



この東西の差違を次の様に説けば、いっそうはつきりしよう。西洋美学は、長い間個人主義文化の中で育てられた。時代の推移を見ると神中心（中世）から、人間中心（近世）に入り、さらに個人中心すなわち天才中心の文化に進んだ。今の美術史は天才史として綴られる。しかるに仏教美学の強めて説きたいのは、天才と共に、天才ならざる人々の美の国への貢献についてである。つまり今までの西洋美術史は主として自力史であるが、仏教はこれと共に、他力史をも明らかにしたいのである。今までの西洋の見方は、他方の道について、明らかにする所がなく、また興味をも示しておらぬ。言葉を変えれば、今までの在銘史であって、無銘史ではない。しかし美の世界における無銘史は厳然たる存在で、その意義も価値も宣揚されねばならない。特に個人偏重の今日、この事は必要であると考えられる。天才には自力の道、衆生には他力の道、この二道を共に明らかにせねばならぬ。しかも二つの道であって、究極においては一つである事も見届けられねばならぬ。

柳宗悦

異貌の日本近代思想
〔2〕

目次

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

三枝博音

〈科学技術史〉

日本の技術の籠居性 12

日本の文化の摺みどころ 19

日本の科学を育てた人としての梅園 35

狩野亨吉

〈古典籍・書画鑑定〉

安藤昌益 48

権藤成卿

〈古制度学〉

官治か自治か 82

大川周明

〈政治思想〉

敗戦日本再建の思想 104

北一輝

〈政治思想〉

日本改造法案大綱 120

津田左右吉

〈歴史学〉

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

日本歴史の取り扱いかたについて
歴史の学における「人」の回復 146
日本思想形成の過程 157

生田長江

新事物崇拜という近代的迷信 214

内村鑑三

近代人——自己を神として仰ぐ者 230

柳宗悦

仏教美学の悲願、美醜対立の彼岸 246

富士川游

医術と宗教 266

北里柴三郎

学問の独立と政治 294

〈文芸批評〉

〈キリスト教〉

〈民芸・宗教〉

〈医学史〉

〈細菌学〉

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

1巻 目次

- 西田幾多郎……………〈哲学〉
新しいロジックを求めて ヒューマニズムの行き詰まりから新しい人間へ 歴史的生命的の世界
- 三木清……………〈哲学〉
東亜協同体と近代的世界主義 東洋文化と西洋文化
- 岸田劉生……………〈絵画〉
近代の誘惑を卒業した誇りと孤独 今日の悪趣味的時代に処する道 東洋の「卑近美」
- 高村光太郎……………〈芸術〉
美と生命 日本美の源泉
- 野上豊一郎……………〈能楽〉
能の物狂い 能の写実主義と様式化
- 山田孝雄……………〈国文学〉
「は」と係助詞 西洋化日本における文法学の困難 日本の文字の歴史学 日本の敬語と文法
- 九鬼周造……………〈哲学〉
偶然と運命 驚きの情と偶然性
- 田辺元……………〈哲学〉
常識・科学・哲学——東洋思想と西洋思想との実践的媒介

SAMPLE
Shoshinshi.com

異貌の日本近代思想

〔2〕

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

凡例

- 一、本書刊行の意図などについては1巻巻頭に「本書について」として記載した。
- 一、各文章の初出はそれぞれの末尾に記した。
- 一、各文章のタイトル、見出しの文言は省略あるいは変更した場合がある。文章のタイトルを変更したものは元のタイトルを、初出を記したところに併記した。
- 一、本書では読みやすさをむねとして、漢字と仮名の使い方や送り仮名、仮名遣い、片仮名語の表記を現代一般の感覚で違和感の少ないように調整した。また、読点と中黒点を補ったり（例えば「にさん」と読むべき「二三」を「二、三」に、「朝鮮人台湾人」を「朝鮮人・台湾人」に）、異体字関係にある漢字同士、字義の通じ合う漢字同士は現在一般に使用されるほうで表記した場合がある（例えば「侯」を「侯」に、「互」を「亙」に）。
- 一、本書刊行所による註記は「」で括って文中に挿入した。

SAMPLE
Shosha-Shinshu.com

三枝博音

.....

〈科学技術史〉

三枝博音（さいぐさ・ひろと）。一八九二年生、一九六三年歿。哲学、思想史、科学史、技術史を研究。東京帝国大学西洋哲学科卒業。医学史の大家富士川游に師事。東洋大学、立正大学、法政大学などで教鞭をとった。一九三二年、戸坂潤らと唯物論研究会を組織し『唯物論研究』の編集責任にあたるが、翌年、思想弾圧により教職を辞し、日本哲学思想史ならびに科学・技術史の研究と著述活動に専念。『日本哲学全書』『日本科学古典全書』など基本史料を編纂。戦後、明治大学教授、鎌倉大学校（鎌倉アカデミア）校長、横浜市立大学教授・校長を歴任。国鉄鶴見事故で死去。著作に『三浦梅園の哲学』『技術の哲学』『日本の唯物論者』などがある。

日本の技術の籠居性

1

私が籠居性というのは停滞性とはかなり意味がちがう。停滞性とはもちろん一つところに停つてのいることを言うのではない。ややもすれば停滞しがちであることを言っているのである。しかし、停滞しがちであるとは進歩への可能性が全然ないというのではない。少なくとも進歩への可能性を容れているのである。ところがここに、進歩への可能性が少ないというだけでなく、プログレスへの可能性が奪われ、プログレスへの傾向は閉じられてしまっているという状態がある。私はそれを籠居性と名づけたと思う。

次に、ここで「日本の技術」というのは、くわしくは明治以前の日本に見なれたところの技術というように言い表わすべきであろう。けれども、ヨーロッパの生産技術が全面的に移植されていると思われる明治中期以後の日本の技術にあっても、かなり右にいう籠居性をその内に持っている。それで、「日本の技術」という全体を蔽うような言い方をしても、それはゆるされていいと思う。いや、むしろ今日の技術人たちのころになおこの籠居性がありはしないか、それを衝いてゆくことは大切なことであると思われる。

籠居性は実はひとり日本人の技術面のみのことでなくて、私は日本の文化の大きな特質の一つであると考えたい。その籠居性を先ず技術の面から指摘してみたい。この論稿はそういう企てを目ざしているものとしていただきたい。

2

私たちはものを確実に知りたいたいという要求に日々出会う。ものを曖昧にして置かず確実に知りとるようにする、それを人は科学的だという。もちろん、それは科学的である。しかし、ほんとうに科学的であるとは、確実に知りとるその方法が次のような性格をもつことによって成立することにあるのである。すなわち確実に知りとる一つの方法には必ずその次にまた確実に知りとる第二第三の方法の準備がしてあること、実にこれである。科学が自然法則の上に立っているというのは、このことを言っているのである。そういう性質こそ科学的であることの必須の要件である。

日本の技術も技術である以上、必ず方法とか手段といわれるものの上にでき上っている。しかるに、その方法は次の方法、そのまた次の方法へと発展してゆく可能性がそこにない。次の方法がそこから展

びゆく芽が出るようにされてない。実にこの意味において科学的でないのである。そこから次ぎ次ぎに新しい発展の芽が出てくるような性格でないのである。いや、もっと積極的に、新しくさらに展開する可能性が封じられ、閉じられているのである。それを私は日本的技術の籠居性と呼ぼうとするのである。

では、閉じられており、内へと塞がれているその内部性はどのような状態かと言うに、そこには新たに展びてゆくことを創案せねばならぬという考慮や努力は欠けている。至極安穩である。冬の日の日だまりのように平和である。この籠居性、それが日本の技術の特質である。私はこのような特質は、日本の文化そのものの性格でもあると断言せざるを得ぬ。俳句の世界なども、このような、日本の技術の特質から見直される必要があると考えられる。

技術というと明治以前の日本では「芸術」という言い方に注意せねばならぬ。もっともこの語は今日私たちのいう芸術の意味とは異なる。私たちのいう芸術は、早わかりのするように言えば、日本の近代演劇史に出るであろうあの「芸術座」の芸術という表現のとられた、ほんの少し前から用いられはじめた言葉である。それまでの芸術とは文字通り芸道の中の技術のことである。医師や武術はもとより算術の如き、その他諸芸諸道みな芸術であった。このような諸技諸芸のことをあえて言うのは、これらの中の非科学性の表現としての「秘術」性、秘伝性をここに示したいからである。秘伝性がすでに籠居性にもとづいて成立していたのである。秘伝性の事実は、日本の封建性研究の一部として、日本の歴史学の学徒の特別の義務のある研究領域であるといわねばならぬ。

私は籠居性の事例について、次に叙述せねばならない。

SAMPLE
Shinshu.com

日本の大工たちの用いる物差のうちに「うらがね」と呼ばれる式の物差がある。うらがねの存在についてはすでにしばしば指摘せられている（例えば、理学博士中村清二先生などそのよい例である）。建築大工が一本の木材から、何ほどの大きさの柱が取れようかと考えるとき、彼がこのうらがねを使用するなら、まことに便利にしかも容易に計りとることができる。矩差かみさしの裏に特別の目盛がしてある。もちろん表は普通の矩差である。たとえば表が一尺あり表いっばい一〇寸の目盛がしてあるとする。裏にも目盛がしてある。但し目盛の上で一寸に当る長さがこの方は少し長い。その比は $\sqrt{2}$ である。というのは、正方形の対角線の長さとその一辺の長さとの比にしてあるからである。大工が一本の木材の切口に矩差の表を当ててみる。切口の直径をとってみる。もし六寸あるとすれば、大工が裏を返して見ただけで約四寸三分という目盛に相当しているのを直ぐ見てとることができる。約四寸三分四方の角材がとれる。大工は切口に矩差を当てただけで、もうこの材木からどれほどの角材がとれるかを知ることができる。大工の見習弟子は、この簡単な操作を習っただけでもう一生この安易の技術の方法を手に入れたことになる。それから先きへは見習弟子の思考は進もうとするようには事態ができていない。それがこの術の本質である。

日本の船頭たちは逆針さかばねという特別の磁針器を使用している。これは閻針あんどんとも呼ばれている。『廻船安乗録』（文化七年〔一八一〇年〕）では逆針として、『廻船用心記』（文化十二年〔一八一五年〕）では閻針としている。明治六年刊の『増補船路細見記』では船用逆針として出ている。普通の磁石では、子丑寅卯の順序は時計の針の進む方向に刻みつけてある。この順序を逆にして、亥戌酉申という順序に、従って最後の

ところは丑をへて子に戻るといふ順序になっているのがこの閏針である。この針に従えば、船子は文盲のままでもいいのであって、至って簡便である。たとえば、船が真西の方向（酉の方角）へ航行しようとする。そのとき、針の方向が、自分の行きたい方向とは反対の東（卯）の方向へ向くように船を動かす。西に行くべきであるが、針は磁針盤上の東に向くようにする。つまり、船子は船の行くべき方向とは対照になっている方向へ針が向くようにせねばならぬ。もともと針は北を指すことに努めていて微動の後はずねに北を指す。だから、盤上の東の方へ向くようにしても、位置をかえるのは船と船にとりつけられている盤と盤の中心に立てられて針を支えている棒（この三つは相互固定されている）とであって、針は磁北の北へ向いたままとり残されている。だから、船はそれだけ本当の西の方へとへさきを向けているわけである。これは考えると煩瑣である。また、船子が船をあやつる実際の場合でも、方向の換算をせねばならない。私たちが鏡にうつっている時計の針を見て何時であるかを見て取るほどの煩しさを船子はせねばならない。波浪の中で、文盲で「あつていい」ところの船子が即座に船の方向をきめるとき、以上のような煩瑣を省略するには、最初から羅針盤の目盛を逆におけばよい。つまり東（卯）のところを西（酉）のしるしになつていれればよい。船子は「船の方向が自分の行きたい西（酉）の方向とは反対の東（卯）の方向へ向くように船を動かす」といふ面倒くささをする必要はない。ただ盤上の子の方向（船のへさきの方向）を自分の行きたい方向すなわち西の方向へ向けるには、盤上の酉の方向と針の頭とが合うようにすればそれでよい。もつと簡単に言えば、船頭が船子に亥の方角へ漕げといえど、盤上の亥のところと針の頭とをそろえればもうそれでよい。船子は、ひいては船頭もこの簡単なことを、馬鹿の一つ覚えに覚えていれば、それでよい。この逆針を考案した人がひとり右の事情の消息を理解していればよい。他の者は盲従でよい。その他の者らは盲同様でいいわけである。「閏針」とは

よく命名したものである。

技術上の器械は一般に計算並びに操作処理の面倒な行程を省くようにできているものである。これは当然である。それにしても、器械操縦の簡単さから省略されている面倒な諸行程のうち一步入ってゆく入口では、ものが逆になっていような難関はない。むしろその入口の一步から次の二歩へは探求の心さえあれば誘引されるようになっていいる。闇針の場合では、その便利さの本質そのものが、相手が無学文盲のものゆえ無学文盲のようにして置いてやるという精神でできている。その便利さの中に立ち籠っていいのである。その中で安閑としていればいいのである。磁針と磁北との関係、磁北と北というものとの物理学的関係、そういう学問的問いが若い船子たちにとってくるようにはもちろんできていない。否、閉ざされているのである。便利であるか、この技術がまたそれのみに閉ざされている。この技術からさらによりよい技術へと発展するものは出て来ぬのである。芽はないのである。

4

航行の技術の上でこの逆針と関係のある他の技術がある。この闇針式の羅針盤では方向は一二に切つてある。この一二はもとより十二支である。十二支の考証もここでは必要でなくはないが、これは省くことにしたい(新城新蔵の『こよみと天文』は一般の参考書として格好である)。周知のように今日世界どこでも用いられているヨーロッパ式のすべての航海用羅針盤は三三方針である。三三は東西南北の間をそれぞれ二分し、さらに二分を進めたもので、進み方は等比級数でゆく。十二支でゆくと、もう一つ細かく切つて二四である。中国や日本の航行羅針盤は二四方針である。三三方針が二四方針よりも精しくゆくことは当然である。一二の動物の名に因み、これを若者たちに覚えさせても、それ切りのことで

あって、それには何の発展性もない。それよりは、抽象的でも東西南北でゆけば、外の同様の器械との連絡もついでいいのである。十干十二支、陰陽五行、引いては運氣論など、ただそこそこの面白さや都合よさや楽しさでできているので、それが数学の領域での発展との連絡は絶たれている。発展の可能性はない。江戸時代でも三三方針を用いた進歩的な学者たちは、二四方針を用いた反動的な人たちから攻撃をうけていた。籠居性はどの技術の方面にもあるのである。

『百工秘術』（享保）の類の本は幾種類もあるが、それらの記載のものは（もつとも、上述の諸技術に關するものが記載されるようなものでなく、「好事のひとをしてその工術あることを知らしめる」という風の日常手近の事に関する便利なる術を教えようとしている）すべて、その技術及びその道具は他の場合への応用性はなく、それきりに終るのである。今日の日本の機械技術において互換性の欠如を指摘されることしばしばであるが、これらの欠点はみな日本の技術の特質の影響であると考えられる。

一つの技術領域から他の技術領域の間に連絡がなく、それぞれの技術部門が籠居性をもっていることは、知力の働き方において知性の本質である普遍化の能力が欠けていることに基づくのである。自然の世界という概念一つ確立しなかったのはそのためである。私は籠居性の実例を数多く指摘してみることが、先ず私たちのなしとげねばならぬ仕事ではないかと思う。なぜというに、日本人はそういう事例をたくさん出してみせて、その上で理論的なものを理解させねばならぬほど、一般はまだまだ日本であると思われるからである。

（初出）『国民の歴史』一九四七年十一月号・十二月号。書肆心水刊『西欧化する日本 西欧化できない日本』に収録。

SAMELIFE.com
Shosha.com